

の全部に票法が施行された。これは淮北行塩

地の内部ではすでに引地の制が廃止され、引地独占に終止符をうつたものとして重要な意義がある。淮北官塩の価格は半分に下る一方

淮北票塩の塩課収入は定額の三倍に達し、さらには淮南塩課の欠を補いさえした。

ついで彼は淮南塩政の改革に手をつけたが、旧制を利とする豪商・官僚らの反対があり、資金難の運商は力を失い販塩に消極的であつたので、成績をあげないうちに病を以て辞任した。しかし道光三十年には後継者の手で淮南にも票法が布かれ、ついで各塩場に塩政改革が行われたときはその準則となつた。

しかし票法にも問題はあつた。独占の廃止は群小塩商の競争をよび、塩場の塩価を吊上げ販売価格を引下げる傾向が生じた。乱売は経費の大きい大商人に多少不利であつたらしい。また一部には塩の買占めないしは再独占のおそれすらみえた。他方、塩課の請負方式は君主独裁制に適合している。強力な独占的塩商に塩課を請負わせることは、その時々々の経済変動の影響から塩課を護り、常に一定の収入を保証する途であつた。(思うに塩課なるものは消費税の性格をとうに失つて一種の

営業税ないしは権利金の存在と化していた。

だから塩課収入は官塩の販売の成績とは無関係のもので、合理的経営を助長し、塩の生産と消費の拡大によつて塩課の増収を企てるこ

とは本来の塩政の在り方ではなからざれたのもあろうか)果して同治年間には淮南塩に綱法的な請負制が復活するにいたつた。これらのことは当時の独占の意味を考へるための

好材料である。最後に、塩商の性格について著者はいまひとつ興味ある問題を提供しておられる。明末から清の盛時にかけての揚州塩商の発展のさまはかれらによる産業の近代化の推進をさえ思わせるが、しかしそれは終始

商業資本・利貸資本にとどまり、ついに産業資本に転化しなかつた。その理由は、塩業が君主独裁制との特殊関係からうけた強い統制、独占的政商的性格がもたらした経営の不合理、企業の合理化能率化を妨げた安価な労働力の存在と資本・経営・労働・技術の分裂、浪費による資本蓄積の不可能などである。

このほか生産者としての籠戸の問題なども紹介すべきであつたが、紙数が尽きたので、寛恕をお願いして筆を擱きたい。(A5本文四〇〇頁、索引二九頁、定価一一〇〇円、東洋

史研究会刊、東洋史研究叢刊之二)

—— 笹本重巳 ——

H. Aubin:

Stufen und Triebkräfte der abend
ländischen Wirtschaftsentwicklung
im frühen Mittelalter. (Viertel-
jahrschrift für Sozial- und Wirt-
schafts-geschichte, 1955. Heft 1.)

古代地中海世界に繁栄した商業と貨幣経済は都市と市民を形成したが、ローマの滅亡はこれら機能の多くを失い、その復活をみたのは中世高期である。商業の存在と貨幣経済の消長という観点から、ローマ崩壊後の社会・経済の発展に二つの段階を設定し、都市の成立と中世高期における商業復活への見通し図を変えようとするのが、この論文の主旨である。段階とは、フランク王国建設後、九世紀末の崩壊にいたる時期ともう一つは新たな活力が歴史発展の基底部たる社会・経済の決定的な形成に加わる十二世紀にいたるまでの時期。この二つの段階に経済発展が持続する。ただしこの段階(Stufe)の内包するものは、国民経済学(Volkswirtschaft)や歴史理論上論じられるような概念的抽象ではな

く、時代を包括し、その経済・社会の示す基本形態を發展の裡にとらえた断面をいう。

まず当面の課題の中世經濟發展の基点をどこに求めるか。それには、西ローマの崩壊ないしは古典古代文化の中世初期への繼承とゲルマンの歴史舞台への登場ということ、領域的には、ローマ帝國の支配下にあつた地域とスカンジナビヤや東方へ向つてゲルマン民族の定住が伸張した地域の經濟構造の相違。端的にいえば、一方は他方より豊に古代文化を保持し、商業と貨幣經濟に優位を示すということである。

× × ×
ローマの文化遺産がどのようにゲルマン人によつて中世初期のヨーロッパ社会・經濟に融合されていつたか、ドーブシュを引合いにすまでもなく、古代・中世文化連続の事情は、今日地域的な差違を付して確認されている。ただ企業の制約、自由商業の制限、上層階級の經濟自給自足化にもとづく、帝政末期の貨幣經濟と商業の決定的な衰退を認めざるを得ないし、同時に商業習慣を習得せるゲルマンが荒廃したローマニアの社会・經濟の復興に果たした役割を正しく理解すべきである。こ

ここでビレンヌのテーゼを想起しよう。ゲルマンのローマニアへの侵入を大局からみて、その社会・經濟の交容の決定的契機とはみず、

五世紀から七世紀にかけての商業の断絶はみとめないが、ローマニアへのアラビア人の侵入によつて東方との通商は絶たれ、都市は衰退し、經濟の農業化をきたす、マホメットとカール大帝によつて、この經濟の隘路が打破される。このテーゼは、ゲルマン人をアラビア人におきかえたにすぎず、容認しがたい没落説(Katastrophen-theorie)である。ビレンヌが描く西ヨーロッパの農村化の事實は、すでに考古学、錢貨学から反くされているし、地中海周辺地域の錢貨の分布や商品の發掘から推して、アラビア人の侵入に重要な意義を認めるを要しない。それのみか、ビレンヌの構想は、ローマニアの經濟に重点がおかれ、

ゲルマン商業伸展の基点となつたラインやドナウ地方は十分考察されていない。しかるに、北歐考古学・錢貨学の成果が語る、メロピングおよびカロリング時代を通じてフリーランドを中心にした北進するゲルマンの商業圏の拡大は、メロピング王国の政治的經濟的關心は常に兩(即ちローマニア文化圏)に向け

られるとするビレンヌ説にかならずしも合致しない。

西ローマ帝國崩壊は文化の喪失でなく、ローマはいわば双肩から重荷を下したまでだと解釈するならば、ゲルマンが經濟活動の面で復興が要求されたものはそう多くはなく、むしろローマという統制組織(Wanngesystem)の除去が、中世初經濟へ一つの途を開く。したがつて、メロピング時代フランクの政治構造は、ローマの束縛から解放され、それに何ら消極的な性格を賦与する理由はない。フランク王国の國家建設過程の積極的側面は、ドイツ内部への古代文化の普及——例えばクリスト教化の北進——ということであり、さらに高まる國家活動とともに、所謂カロリング・ルネサンスとなつて結実する。だが、かかる過程はたしかに生産技術や商業習慣の如き古代の傳承の受容を強く示しているものの政治力の充実からただちに經濟の發展を過大評価することは許されぬ。他方、従来余り論じられなかつたゲルマン独自の經濟領域においても、ライン、ドナウのローマ境域での商業の萌芽、さらに商業習慣の習得、北へフリーランドに伸びる商業地域の拡大は、北海・

バルト海沿岸における遠距離通商の根をつちかつていた。

要するに、オーバンは、大巾にドーブシュのメロビンガーからカロリンガーへの経済の連続ないし発展を容認しつつ、ビレンヌ説もつとも戦後のドイツではコルネマンをはじめビレンヌのアラビア人説 (Arabithese) を一つの没落説としてきめつける向が強い一を最近の実証的研究の成果を援用して、鋭く反はく、メロビング時代の経済の断絶を否定するとともに、中世初期におけるゲルマン人の経済活動を正当に評価しゲルマン人の生活空間の北・東方への伸展に対応して、そこに中世における遠距離商業の基礎を求めようとする。

X X X

第一と第二の段階の間には、カール大帝没後の内乱、分裂、国家権力の弛緩、外患等で経済・文化は下降を辿るが、十一世紀には漸次回復の兆をみせ、十二・三世紀には東方植民、十字軍といったモーメントから新機運が芽生える。増大する人口の活力は市 (Markt) および都市 (Stadt) の充実、広汎な地域への都市と貨幣経済の滲透という変革を招く。これがヨーロッパの新段階を劃し、遠距離商業の発展が、この第一ステップとなる。都市の

研究は、従来法制史とか地誌学の個別的的局面から集積されてはいるが、全体としての把握に欠けるうらみがある。近時ビレンヌ門下のガンズホフ、ヴェルコーテルンやブラーニッツ、アンマン、ヤンクーン、エンネンなどのすぐれた労作が加えられており、これらから等しく明かになることは、中世初期の遠距離商業の存在および発展の事情である。ブラーニッツによつて唱えられた北欧の商人移住地のタイプとしてのヴィイク (Wik) の問題は、都市成立に新解釈を提出しているが、このヴィイクは、北海沿岸に限定されたものでなく、ライン流域のフリースランド人居住地にも散布する。あるいはローマ由来のキヴィタス (Civitas) の中世初期における機能は、ヴィイクのそれとともに都市の原形として多く通商事実を明示する。

十世紀には、市は封建社会の上層部にとつて不可欠の存在となり、これに対する認識を改めねばならなくなる。商人の市への定着化にともない、市は定まつた商品の供給を必要とする。九世紀に遠距離商業に従事する商人が西方から手工業者を招へいたバルト海沿岸のハイタブウ (Wik Hithabu) の例、ある

いはほ同じ頃、ハイタブウやゲート (Gat) における如く、遠距離商業の商品を求めて市に移住する商人の存在は、商品・銭貨の分布が教える。かくして、商品に対する荘園の散発的需要から市の規則的需要への移行が起り、ツンプトの系譜を荘園領主下の農民の手工業専門化に求める荘園起源説 Hofrechtlichen Theorien) が主張される所以であるが、六世紀ライン流域の装飾品、陶器、ケルンのガラス生産から、この起源は古く遡ることができ。

バドルフ (Badorf) やビングスドルフ (Pinsdorf) の北方向け陶器のライン流域およびフリースランドの分布は遠距離商業の所産で、ハイタブウやライン河口のドルスタット (Dorestad) の発掘が確証を与える。これから、すでに市への手工業者の移住および彼等と遠距離商業との結び付きが、市の都市への発展の端初を物語る。手工業者は市場の需要に応じるに止まらず、さらに日常の必要を賄い、市への商人の定住を促す。ここに都市成立の一面が明確となる。十一・二世紀には、これら市の拡散から商業と貨幣経済が極めて広い空間に達通し、フリースランドにみられる商人の団体組織は、後のハンザの前駆的様

相ざえ呈する。

中世北歐商業の前駆を荷うフリーストランド商業の衰退後は、フランクの南部、即ち北フランクがヨーロッパ文化の中心部となるが、経済現象の推移は根本的には大きな変化もなく、北西部への経済発展の主要地域を占める。また古代文化の遺産を最も保存し、地中海を介して東方商業と結ぶイタリアでも、十字軍時代のイタリア都市の繁栄を帰着点と考えるならば、アルプスの北と南では政治的経済的条件が相違するし、ローマ都市との直線的接続は認められないが、北とパレルにほぼ同様な経済事情の推移を理解してもよいであろう。十二・三世紀の遠距離商業の活潑化は、ゾンバルトの商人の資本蓄積、あるいは大規模商業 (Die Grosse Handel) の実現という課題はともかくとして、人口増加とそのエネルギーとあいまってヨーロッパに経済活動の大きな舞台を展開する。

× × ×

中世初期の商業に関するドーブシュ、ピレンス論争は、今日では、その内容の精密さや視野の拡大でまつたく面目を一新した感があるし、かつ都市成立の問題も、例えばブラーニツのヴェイクの研究 (オーバンはミッター

スのように従来の説を破棄して、全面的にブラーニツに同意するものではない)、北歐都市とイタリア都市との対比綜合の中に都市の歴史を個別的に考究しようとするエンヘンのそれにも、その歴史的意義を更めて見なおそうとする努力が払われている。オーバンは、これら最近のそれぞれ劃期的労作に足をふまえて、しかも鋭い批判的評価から古代地中海商業の衰退後ゲルマンの担つた商業活動とその領域を正しく理解し、商業(貨幣経済)と都市を通して、中世における遠距離商業とその始源から十一、十二世紀のいわゆる商業ルネサンス(遠距離商業の復活)への発展を跡づけ、中世初期経済史に正しいオリエンテーションを与えようとしている。換言すれば、ボンヌの「商業の復活」(La renaissance du commerce) というブラーニツの「十一、二十世紀の革命的な新时期」なるテーマに、精密化された実証を補うことによつて、より緊密な結び付きを提示するものである。

Triebkräfte, Staatssozialismus, Menschenverlust とか、いつた理念的用語の解釈には、かならずしも左袒しかねる節もあり、それ故この論文の真意を紹介し得たかどうか

疑問であるが、それはともかく、かかる企ては、ドイツ経済史学の伝統を正しく継承する。そして Vierteljahrsschrift für Sozial und Wirtschaftsgeschichte の主幹である彼が、当然な事ななければならないことであつたらう。一言蛇足を加えるならば、中世初期荘園における手工業者の都市への移住という大きな問題も、実証的研究の不足もあつて、農村経済との関連が深く掘り下げられていないため、極めて平面的にしか理解されないのではなからうか。

—堀内一徳—

執筆者紹介

村井康彦	京都大学大学院学生
笠井倭人	京都大学大学院学生
木村 宏	大阪市立大学助手
曾我部静雄	東北大学教授
樋口隆康	京都大学講師
藤岡謙二郎	京都大学教授
渡辺則文	広島大学助手
笹本重巳	京都大学大学院学生
堀内一徳	京都大学大学院学生